叶えたい夢

SyuutokuB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
叶えたい夢

【Ｎコード】
Ｎ３８５９Ｙ

【作者名】
ＳｙｕｕｔｏｋｕＢ

【あらすじ】
何処にでもいそうな阿藤清次は、恋愛の事に関しては、しかも自分の事に関してだけ鈍感な高校一年生である。
清次を中心にして部活やら幼馴染との過去やら不思議な出来事やら妹との絡みやらその他を、解決したり、時には悲しみ時には笑い、そんな事を書こうと思っています。
何回か小説を書こうとして断念、が多かったのですが、今回は続きそうな予感ですので期待して見ていただくと嬉しいです。
出来れば感想とかもよろしくお願いします。

第一話

九月二十三日

思いっきり走って、思いっきりジャンプして、思いっきり頭を使って、いつの間にか夢中になっていき、そして時間が経つのを忘れるくらい楽しんでいる。

どのスポーツにも全力で全力で向かっていく、そんな女の子がいた。

その子の汗が顎まで伝わり、床にポタポタ落ちる。そして、いつもより違うキュッキュという音が体育館中に響き渡る。

雨が降った時に体験できるような、髪が肌にくっついている状態、何よりもブラ透けがある。一番黒が、白い半そでのジャージが汗で透明に近づき目立つが、たまたまなのか、今日が勝負なのか考えものである。

その女の子は集中しすぎて、男子たちがどう見ているかなど気にしていない様子。それどころか、襟をパタパタさせて、あわよくば、胸が見えてしまう。

時々、自分や、自分のチームのナイスなプレイがあった時、嬉しさのあまり、ジャンプをして、その時両手を上下に振り、足も腰に当たりそうなくらい上げる。しかし一番は、輝くような誰もが魅了する笑顔魅せる。

笑顔が似合うだけあって、顔は整っており、目がパッチリの一重

まぶた、肌に何一つとして汚れが見えなくて、唇がいつも潤っていて、こめかみあたりに流れるキラッとした汗の粒、測定不可能なくらいの笑顔なのである。

髪もストレートでロング、いつもは縛っていないが、スポーツの時だけは、ポニーテイルにしている。そのせいもあって、余計に引き立つのかもしれない。

背は、標準よりは高く百六十五センチある。やる気だけでなく身体能力もずば抜けてあるので、身長に比例して、スポーツマン、もといスポーツウーマンになっている。

これだけでもいいのに、スタイルも抜群、特に腰のラインが、エロい。

この女の子の名前は、奥村美夏乃、高校一年生である。

「な〜にボ〜っとみているのかな清次く〜ん」

曽我部憲一郎ことソガケンが、憎たらしく、わざとらしく、話しかけていた。

人間というのは、どんなに関心がなくても、突然、しかも大声で、しかもしかも耳元で声を囁かれると、どうしても反応してその声の方向に振り向いてしまう。

「――――ひっ、う、うん？何か言った？」

阿藤清次こと清次が、分かりやすい反応をした後、あたかも何もなかったように冷静に聞くふりをした。

「はは～ん。やっぱり美夏乃さんか？」

ソガケンは何も考えず、ふとお決まりの言葉を口に出した。

「うっ！うん？は～？ち、違うよ～。ただ時計を見てただけだよ」

――最初、最初は見るつもりなんてなかったんだ。ただ、ふと時間が気になって時計を見たら、ちょうど美夏乃さんが、美夏乃さんが目に入っただけなんだ。あの楽しそうな笑顔に釘付けになんてなっていない。ただ、うん？い、いやホントに目に入っただけなんだ。てか、何でこんな言い訳くさいことを言っているんだ俺、何も考えていないぞ～！――

第二話

清次は、蒸し暑い中、体育館で運動をしているにもかかわらず汗をあまり掻いていない。しかし、今、違う汗が体中に大量に流れている。その尋常じゃないもしかしたら病気じゃないかと疑わさずにはいられないくらいの量になっている。初対面の人が見たら、救急車を呼びかねない。

「あ～」

――またですか。この前みたいに倒れないでくれよ。しかしま～ほんとに自分自身のこういう話に耐性がないよな～。もう高一だぞ！

――

「と、時計見てたんだな！でも、試合中（クラスのＡチーム対Ｂチームというしょぼい戦い）だ、余所見すんなよ！」

ソガケンは、微量の冷や汗を掻きながら、走って行った。

「あ、ああ」

清次は体がすごく熱いことに気付き、下を向いた。

そこには、今まで流れていた汗が顎まで伝わり、小さい小さい水溜まりになっていた。

――気を使われてしまった。なんで感情をコントロールできないんだろう？しかも、それが、恋愛に関してそれも自分に対してのだけって……。おそらく、友達は知っているんだよな～あの事を、

俺はどうすればいいのかな？――

体育館という閉ざされた空間で、空を見上げようとしている。見えるのはただの、天井なのに、遠くの空を見つめているようにしか見えない。儚げに眼を細めて……。

――こんなに苦しいものだとは思わなかったな～どうせ叶いはしないのに……。俺はみんなにどう思われているのかな？でも、直接聞くのは恥ずかしいしな。

あなたはどう思っていますか？

美夏乃……ちゃん――

考えるのをやめにしたらしく、走って試合に戻った。

清次は運動神経ばりばりなので、すぐにボールを奪い、華麗にシュート。ドリブルも、ディフェンスも、バスケ部よりもうまい（このバスケ部が弱いのが原因）この時、誰の目からも輝いて見えるのだ。しかし、当の本人は全く気付いていない。ただのスポーツバカと思われていると思っている。

いわゆる、鈍感、ってやつに分類される。

他の人の恋路のことだったら、誰よりも分かるのに、それを自分に当てはめることができない。可哀そうな性格だったりするのだ。

「は～。今日はいい天気だな～」

清次は、いやそうに言いながら、バスケットボールを続けている。

――俺は、雨の日が大嫌いだ――

「は？清次、頭大丈夫か？」

そう、今は激しい雨が降っている。

一粒一粒が大きい、すべての音が掻き消されてしまうほどの音に量。

それが逆に静寂と呼ばれる時がある。この音以外何もないのだ。

第三話

五月一日

「・・・ちゃん。お・いちゃん。お兄ちゃん！」

――あ～清美か。って何で今日に限って起こしに来るんだ？今日何かあったっけ？――

清次は仕方なく起きることにして、目を開けた。

その時清美は青いプラスチックのバケツを傾けていた。

バケツの口の部分が下に向いた時、清美はすでに清次が起きていることに気がついていた。しかし時はすでに遅かった。清美の顔は少し曇り、清次は、時間が止まったかのように口を開けっぱなしで唖然として、何が起きようとしているのかまだ理解できていない。

「――――パシャー」

ベッドが何とも無残なことになった。

しかし幸いなことに、無害な水だった。

人類は、寝心地、保温性（今は夏だから関係ない）、デザイン、を追求して従来よりも断然よくなっている。しかし、水に濡れてしまうと、機能が、格段に落ちる。それ以前にじめじめして気持ちが悪い。

しかし全身にかかったため、すぐに諦め、プラスの解釈をするだろう。今が、夏なのだから。

「ご、ごめんねお兄ちゃん。もう起きたなんて知らなかったからさ～ね～。それに、これで目が覚めたでしょ？」

清美は兄に対しての妹特有の少し甘えた声で、この危機を乗り越えようとした。

――お兄ちゃんが私の可愛い声ですぐに起きれば問題なかったのよ！――

「おい、俺が起きていなかったらいいのかよ！ってかいくら何でもやりすぎだろ！」

清次は、怒鳴った。

この言葉を言った後、鼻に水が入ったのか、絶えず咳をした。

「大丈夫、お兄ちゃん？」

「大丈夫なわけないだろ！」

清美の少し心配した声かけに、清次はまた腹が立って、怒鳴った。

――こいつはアホなのか？まあ学力はあまり芳しくはないけれど、小学生じゃないだろ！中三にもなって、よくもまあこんなことができる。不思議でたまらない！しかも受験生なんだから、こんなことしてないで、勉強でもしてればいいじゃねえか！前俺と同じ高校に行きたいって言っていたけど、こんなことしてたら無理だな。絶対

「どうしたの黙っちゃって？でも今は夏だから、気持ちいでしょ？」

清美が屈託のない笑顔で、言ってきた。

清美の最後の一言でカチンと来た清次だったが、あまりにもムカつくと、怒りを通り越して呆れてしまう性格なので、溜息だけついて、許すことにした。

しかし、清次はここですぐ許してしまうと兄としての威厳が保てなくなると思って、怒っているふりをした。

「言い訳はいい！今俺に言うべきことがあるだろ！」

――少しぎこちなかったけど、今の清美の状態なら気付かないだろう――

「は～い」

清美はめんどくさそうに返事をした。

その態度を見た清次は清美を睨んで、ちゃんと謝らせようとした。

清次の目はいつもはいたって普通なのだが、睨んだ時、誰もが蛇に睨まれた蛙状態になってしまう。それほどの強烈なのだ。

しかし、兄妹だから清美は見慣れているはずなのだが、その清美ですらだめらしい。

今の睨みは、レベルで言うと十の内、八まで相当する。

「ごめんなさい」

清美は、睨みのせいで謝ったわけではなく、早くこの空気を打ち払おうとしている。

「あ、うん。それでいい。これで一応この件は許してやる。で、清美、今日は何曜日か分かるか？」

――妹だからこそ自分の非を認めて謝ってくれる。だからこそ威厳をもった兄としていられる。最近は、少し生意気になってきたが、まだ謝ってくれるだけましだ。うちらのクラスの一部の女子がこんなに素直だったらなんて嬉しいことだろう――

清次は少し相手を蔑むような溜息をついた。

第四話

「何曜日？日にちじゃなくて？」

「は？じゃあ両方教えてくれ」

清美の反応が少しおかしいのに気付いた清次だったが、気にすることなく、臨機応変な対応をした。

「あ、うん。六月二十三日、土曜日だよ」

清美は少しはっきりと言った。

――何で六月までつけたんだ？って、今日土曜日かよ！学校ないじゃん！ったくこんなに早く起こすなよ！まだ七時じゃないか！――

「あの～何で休みなのにこんなに早く起こすのかな？てっきり、平日だから起こしに来てくれたと思ったのだが……」

清次は頭をかしげて、清美がしたことを察することができていない。

清次は携帯を枕元から取り、開いた。予定の欄を見たが何も用事がない。それから他には何かないかと、携帯のメールの受信ボックスを開いたりしていた。

――お兄ちゃん。ホントに自分のことなんて何とも思っていないんだね、いっつも他人のところばっかり気遣って、すごくいいことだと思うけど、そういうところは私も好きだし、でも、自分を大切に

しないだなんて可哀そすぎる。せっかくのお祝いなのに――

「は～まだ気付かないの？今日はお兄ちゃんの誕生日でしょ！他の相手のは覚えているのに、自分のは覚えていないだなんておかしいでしょ！」

清美は、とても焦れったそうにして、仕方なく口を開いた。

清美は、なんだか恥ずかしそうにして顔を紅潮させた。

清美は、清次と目があったがすぐに目を放した。

「お、お誕生日おめでとう！いつもお兄ちゃんに迷惑かけているから、今日は休んでいて。私が、朝ご飯作るから！期待して待っていてね！」

清美は、何か言いたげで口をパクパクさせていたが、決心がついたのか、最初の一文をすごく大きい声で叫んだ。

テンパッたのか次の一文を早口で言い、この空気に耐えられなくなったのかすぐさま清次の部屋から出ようとした……。

「――――――ボン！！」

「ああ……」

清次の何も考えなしに直感的な魅入った声を出した。

朝起きたときには必ず窓を開ける、それが清美の癖である。当然今日も清次の部屋と真向いの清美の部屋の窓は開いている。

清美は、清次の部屋に入ってきた時、誕生日だからと、窓を開けて、風通しを良くした。（夏だから窓は開けっぱなしではないかという人もいるかと思うが、網戸がなくあの忌まわしい吸血虫が襲ってくるので、熱いのを我慢して密室にしている。しかし、これも昨日までで、まだ清次が寝ている間に今朝届いた網戸を付けたのだ）

ちょうど、清美が出ようとした瞬間、強い風が吹いてドアが思いっきり、元の場所に戻ろうとしたところに、走ってきた清美にタイミング良く……当たった。

清次は、寝起きでまだ頭が回転できていなくて何が起きたのかが理解できないでいたが、この出来事により頭が覚醒したのか、大声で笑った。そして今までに起きたことが、覚醒によって処理されていき、さらに馬鹿笑いして、数分止まらなかった。

「ああっ！あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

清美は、鼓膜が破れてもおかしくないくらいの甲高い声を立てた。しかし、二度目がないように、慎重かつ迅速に動いてこの地獄から逃げていった。

清美が逃げていった後すぐに、笑い声が消えた。

――笑いで誤魔化したものの、いつもは見せないあのドジっぷりに、不覚にもキュンとしてしまった。あんなにも顔を赤くして……
……こっちが恥ずかしいよ。いつもはあまり話さないから、ホントはああいう面も持っていると思うのだが……とにかく新鮮だった。

そういえば、いつからか清美とあまり話さなくなっていったが、

何かあったっけな～？小学校に時は、よく遊んだのにな～？――

心地よい風が、清次のべたべたした肌に当たり少し気持ちよさそうにしている。

郷愁の雰囲気を漂わせながら清次は、遠くに見える一つ突き抜けた山を見ながら大きな伸びをした。

「ふぅっ。シャワー浴びてくるか！」

再びさっきの惨事を思い出して清次は鼻で笑い、ベットに座っている状態から素早く立ち上がり一階に降りようと足を踏み出した。

「おっと……。やっぱり朝は弱いな～」

ふらつきながら、壁に手をやり下りていく。

この家の階段は木でできており体重がかかるとどの場所でもきしむ音が鳴る。どこかの古い家ではなく築４年の新しい一軒家なのだが、この音が風流なのか始めから鳴っていた。

清次と清美の両親がこの家を設計しており、このよく分からない階段もその一つである。

「清美～。シャワー浴びてくるから」

「あ……うん。分かった」

清次は台所に寄り清美に告げたが、この行動に清美は少し驚いていたが、今日の自分の行動を思い出して、

――気を遣ってくれたのかな～？今みたいにいつも私に構ってくれればいいのに～――

普段二人はこういうやり取りはしないのだが、今日は特別な日だから仕方がない。

第五話

「ピンポン」

「……」

「ピンポン」

「……」

「ピンポン」

「……」

「ピンポン」

「は～い。今いきま～す」

何回ものチャイムでやっと気付いたのか、清美は走って玄関へ向かった。

――何でこんなタイミングで来るの～お兄ちゃんが上がってきちゃうよ～――

左手の四つの指にはすでに絆創膏が貼ってあり、最後に小指に絆創膏を貼りながら玄関へ着いた。

ばらばらになっている靴をそろえて、自分の服装を整えて、ドアを開けた。

「は～い。何でしょう……か……」

あまりにも突然すぎたので、少し思考が停止していたが、それを隠すように会話をし始めた。

――誕生日か～。去年、一昨年はしなかったからてっきり忘れていたけど、やっぱり嬉しいものだな――

頭までお湯に浸かりながら、清次は顔を笑いの形に変えて、その時に漏れた空気の塊をパッチリ目を開けて息が続くまで見ていた。

ピチャピチャと水と水とのぶつかる音が鳴り風呂場に響き渡る。

ここの家は、他の家のお風呂とは形に違いがあり、高さはふつう何のだが、縦横が長く８００リットルものお湯が入る大きいお風呂、だから、思いっきり足が伸ばせてすごくリラックスができる。

――我の妹ながらあっぱれだ！ホント気がきく。でも今日限りだよな～――

清次はシャワーを浴びようとした。しかしお風呂が入っていた。

お風呂とシャワー、どっちがいいかは賛否が分かれると思う。しかし、清次は、大のお風呂好きなのだ。

「ふ～ん、ふ～ん、ふ～ん」

最近はやりのＪｐｏｐの鼻歌をしながら、一旦お風呂から上がり、髪の毛を洗う……。

「あれ？出ない」

――最後か～。中にへばりついているのを取るしかないか――

面倒くさそうに作業をして最後の最後まで使い切り、あまりにも綺麗に取れたので清次は、軽い達成感に浸っていた。

――しかしなぜリンスはまだ二割は残っているんだろう？まあ、いいか。それより清美に伝えなくては！――

風呂場特有のドアを開けようとしたら、滑りそうになったがぎりぎり回避して、清次は一瞬止まった。そして、ゆっくりドアを開けて、

「清美！シャンプー無くなったから買っといてくれ！忘れないように今すぐメモっておけよ！あ、そうそう、歯磨き粉も無くなってたんだ。それもよろしくな！」

何度も言わないように清次は大声で叫んだ。

前述べたように、清次と清美はあまり話さないのだが、生活する時に必要なことがある時は普通に話す。要するに、それ以外の会話が極端に少ないのだ。

「わかったよ、お兄ちゃん！」

よく聞こえるように清美は口に手を縦に当ててメガホン代りにして応えた。

清次に言われた通り清美は素早く紙にメモって、すぐに再び料理に取りかかった。

第六話

清次はお風呂から上がりいつもの歯磨きへと行動を移す（朝は早く起きるのが大変で時間がないのでいつもは、シャワーなのだが）。

「んんんんっ。あ……そうか、終わったんだった」

――さっき清美に言ったばかりなのにな～俺はアホなのか？

……。

誰に聞いたわけでないのに答えを期待してしまった。やっぱり俺はアホなんだな！――

歯磨き粉がなかったことを思い出した清次は、仕方なく何も付けずに歯を磨くことにした。

一歩また一歩、普段どうりだらしない格好でだらしなく歩き、新たな水分を求めて台所と言う楽園へ向かおうとしている。

――あ……。そういえば、フルーツ牛乳切れていたはずだ～～～～。何でまた今日に限って……。仕方ない！清美のコーヒー牛乳もらうか！――

朝、清次は、汗でべたべたしていたからお風呂に入った。その期間、水分を一口も補給をしていない。いつもは水分は捕るのだが、今日はずぶぬれで気持ち悪くて、すぐにお風呂に入った。

今はもうゾンビ化してしまっている。

清次は、目的地のドアまで到達して今まさに手をかけた。

「清美、み、水を！…………？」

清次は、断じて味のない水を飲みたかったわけではない。ただとっさに出てしまっただけだ。

これは置いといて、清次に目の前には、清美ではないものが映っていた。

「…………ちょ、ちょ、清…………。な、なんて格好してんの！ふ、服、服着なさいよおおおおおおぉぉぉぉぉぁぁぁぁぁぁああああああああぁぁぁぁぁぁぁ」

そこにいる清次になれなれしく話している女の子は、最初何が起きているか分からずに、清次を注視していたが、数秒後に少しを理解をして怒鳴った、が、もう数秒後すべてを理解して、急に顔が紅白とくっきり分かるようにその白い肌から真っ赤に変わり果てた。そして女性としての叫びを出して出して出した。

清次は、腰に一枚タオルを巻いているだけであとは何も着ていなかったのだ。

「…………………」

清次の方も、最初は何が何だか分かっていなく、最初に掛けるはずの「何でここにいるんだ！」という言葉が出せず、すごく動揺をした。顔は赤くなりはしないものの、頭には血が大量に上ったらしく、朝が弱い＝朝は低血圧、お風呂と羞恥による急の血圧の上昇、

地面の上に立っている、水分不足……。

「もう駄目……」

誰にも見せることができないような情けない声を上げて……清次は歯ブラシをつけっぱなし、しかし幸いにも後ろに……棒のように倒れた。

「ふぇっ……？」

女の子は、清次が倒れたのと同時に可愛い声を出して、ダブルに予想外なことが起きて、頭が『てん』になっている。

「は？ほぇ？え？えええええぇぇぇぇぇぇぇ！な、な、何が起こったの？って……き、清、清！大丈夫……！！」

危険を察知したのか、すぐに女の子がパニックに陥り、清次のそばに光のように近づき、体を強く揺さぶった。

何度も何度も女の子は清次の名前を呼んで体を揺さぶって動揺が頂点に達している。

第七話

周りの音は、もう八時だというのに、会社に行くサラリーマン、パートに行くＯＬ、土曜日なので、子供たちが学校に登校することはないが、出かける音、それ以前に何の音もしていない。そんな中で必死に叫ぶ声だけがこの家中、いや近隣中響き渡っている。

――何でこんなことに？どうすんのよこれ～～～――

「う、うぅっ。み…ぅ」

ようやく清次は、気絶から覚めた？……上言で必死に叫んでいただけ……。

人間の本能が、水を求めている。清次は、典型的な脱水症状に陥っていた。

「み、水が欲しいのね！すぐに持ってくるから！」

慌てながらも、的確にコップに水を汲み、棚に小指をぶつけてもお構いなしに、少ない距離だが、到着した……。

「……へ？ひ、い、いやあああああぁぁぁぁっ！！！！」

「――――パリン」

水に入ったガラスコップが無残な状態になってしまった。

ガラスの破片が飛び散り、女の子の足に当たり少量ずつながら赤

いものが流れ、少しグロイ形になってしまっているにもかかわらず、それに気付かず見てはいけないものを見てしまったかのように、呼吸、瞬きなどをせずただ立っている。

そこに広がる景色は、清次の……むき出しになった男の勲章があった。

女の子が、さっき夢中になってどうにかして清次を起こそうとしている間に腰に巻いてあるタオルが採れてしまい、今の今まで気づくことができないでいた。

「あっ……水を持っていかなくちゃ」

やっと女の子は状況把握ができたようで、歩きながら新しいコップを出して、華麗にガラスの破片をよけて、清次の場所に到着した。

清次のことを気にしながらさりげなく女の子は、タオルの位置を元に戻そうとした。

――こういう状態になっているんだから、覚えてないわよね。私は何も見ていない、見ていない、見ていない、見ていない――

女の子は少しの間……見ていた。

――わ、私は何を！！――

女の子は、何も変なことなど考えていないと頭を振り、

「はい。水」

同時に清次の目を見て瞼が閉じているのを見て、女の子は安心していた。

清次が自力では起き上がれそうにないのを見て、女の子が頭を持ち上げ膝枕の形をとった。

――不本意だけど仕方ないわよね。清次のためだのも！あ～小指が痛いわ――

「ありがとう」

ちょうど気がついたみたいで、瞬間的に感謝の言葉を述べ、いつの間にか生命の源が清次の口に流れ込む。

少しずつ水が減っていきすべてを飲みきった清次は、満足したのか五秒もかからずにまた夢の世界へと旅立ってしまった。

「な、何で寝るのよ！うううぅぅっ。もう！！」

少し女の子は目が潤んでいたが気にしないとして、このどうしようもない気持ちをどうやって、誰も傷つけずに発散するか考えている。

――どうすればいいんだろう？またこんな気持ちになってきちゃっている。　清がいないときは大丈夫だったのに、清が前にいると抑えられない。

『三年前と同じことを繰り返したくないよ。清助けて！！！！』

なんでだろう？清に助けてほしいなんて。清が悪いのに……

駄目だな私――

第八話

「――――――ドスン」

開きかけのドアから一筋の光が差し込みきらきらと輝いている。

清美は、今の光景を夢中で見ていたので自分が出してしまった大きな音に全く気が付けていない。それどころか身を乗り出して、もっと近くで見ようとしているので見つかるのは時間の問題である。

「……」

清美と女の子との時間が一瞬止まった。

呼吸が止まり、瞼を閉じず、思考も停止する。しかし女の子の冷や汗だけが頬を伝わり顎まで流れてきた。

一滴が輝きながら地面に落ちた。

それが合図になったのか、再び小さい世界が動き始めた。

清美が爆笑をこらえてハニカム。

女の子は再び顔に変化をもたらして、怒られて今にも泣きそうな子供のようになり、誰にも見られまいと縮こまった。

「あ～。ええっとね。これはね～その、ち、違うのよ」

「違うって何が？ふふっ」

いやがらせのように揚げ足を取り、清美は嘲笑した。

――清美ちゃん。これは事故なのよ！決してそんな……そんなって……。ううん。私は何も考えていない。何も考えていないんだから！――

目が誰にでも分かるくらい泳いでいて明らかに動揺しているのが分かる。その後に女の子は愛想笑いを浮かべた。

清美は既に台所の中に入っており、不安定になったドアが勢い良く閉まる。

その時に吹いた風が清次と清美と女の子包みこみ、腰まである女の子の長い髪がさらさらと揺れた。

「ただの事故よ！」

今まで思っていた心情を振り払い、大声で強制的に何もなかったように繕った。

「それより清をなんとかしないと……ああ……そうね。さっきいきなり倒れちゃったのよ。それですごく水分が欲しかったみたいで……。多分、いや、脱水症状だわ」

――こんな面白いところに出くわして、あ～もう、からかいたいじゃない！でもこのくらいにしておかないと。面倒なことになるかもしれないからね――

「あ、うん、たまにあるから」

女の子が空気を変えたくて言った言葉が、今は一番大事なことだったので、二人とも意識が清次の方に行った。

「もう一杯持ってくるわね」

「うん、お願い」

女の子は冷静さを取り戻して、何も起きることもなく水を運んできた。

「お兄ちゃん寝ちゃっているね」

「うん。さっき一杯あげたら寝て……この寝顔を見る限りもう水はもう必要ないのかしら」

清美に悟られないくらいの瞬間に清次をマジマジと見た後、近くにあった机の上にガラスコップを乗せて、清美に確認をとった。

「で、清をどうすればいい？ここはいくらなんでも邪魔でしょ」

――それに、は、裸だし――

「そこのソファーで寝かせよう？お兄ちゃんの部屋に運ぶわけにもいかないから。ね」

清次の真ん前まで来て、女の子にＳＯＳのサインを目で送った。

清美と女の子の息はピッタリで目的地であるソファーに清次を乗せることに成功した。

第九話

二人は清次の顔をまじまじと見ている。

顔がほんのり赤く染まる。

――他の誰でもない清美ちゃんだし大丈夫よね――

――そういえば月姉なんだよね～だから大丈夫か――

二人が同時にお互いの顔を見た。

「「ふふふっ」」

お互いに笑みを浮かべて、落ち着いた時間がまた戻ってきた。

「……ふぁ～」

清次がバカでかい口を開けて、今日だけで三度目の起床となる記念すべき欠伸をした。

「「やっと起きたね～」」

清美と月姉こと月音が顔を見合わせて『ね～』を強調させて、二人にしかわからない意志疎通を交わした。

そして三人が目を合わせる。

「……月音……何でここにいるんだ？」

驚き半面嫌々な気持ちを表に現して清次はため息をついた。

突然の出来事でいろいろと頭の中がごちゃごちゃしていたが、一つ、月音の目を一瞬たりとも瞬きせず目を放さないで清次は見ていた。

「何でって……」

言葉に詰まり、月音は清次の目を見る

「じ、じろじろ見んなななあああああぁぁぁぁぁぁ！」

月音は右手を高々と上げ、どんどんスピードが増して下に降りてくる。

「あっ！」

「パーン」

強烈なビンタガ飛んだ。

「痛って…………………」

強烈な痛みに手では抑えずにはいられなかった。

バランスを崩しその時強い風が吹いた。

「「……………」」

「………」

自分の目から見える一直線上先、数本のビルしか見えない。

「いやああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

――ひとりぼっちになっちゃった――

「――ひっ――ふひっ――ひぃっ――」

月音は清次の頬を右手で優しく触れていた。

月音の手が真上に上がった瞬間、清次と清美は固唾をのんだ。その時の時間が止まったかのようで、月音の手をじっと見るばかりであった。

「ごめんなさいっ。わったし」

こんな行動に出たことを月音は自分自身に驚き、責めた。

既に一粒の塩水が落ち、月音は清次の頬から首にそして肩にそして自分の腰のあたりに勢いなく垂れた。

しかし二滴目はなかった。

「あ……。泣くな！俺を見ろ！」

月音の態度に戸惑いはあったものの清次は、今にも狂いそうな月音に男らしく言い放ち、自分の胸を拳で力強く叩いた。

「うん」

弱々しく頷き、じっと月音は清次を見て自分を正当化しようとして、いつの間にか嘆き悲しむ表情から、真面目な表情になっていき自分のことを考えられるようになってきた。

月音は一度目をつむり、もう一度、清次の目を今度は柔らかい目で見て『もう大丈夫』と一回頷いた。

第十話

「ほら大丈夫だろ！過去なんて忘れちまえ！」

「うん」

清次は月音を諭すように横になっていた状況から上半身だけを起こし、顔が近くなったが気にせず月音からの視線をオウム返しした。

視線を先に外した月音がまた、しかも元気を取り戻して視線を戻し頷き、柔らかく微笑んだ。

さっきの空気とは一変して、柔らかい空気が流れている。

「あっ…お兄ちゃん……」

「ん？あ……」

「きゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ」

月音は全速力で逃げていった。

その時はいていたスリッパの片方だけ脱げて、一つ入口に淋しく在った。

台所には二つ出入り口があり、出ると長い廊下が現れる。

「ごめんな。許してくれよ！」

「……」

ぐるぐると台所を回りながら、今までこの繰り返しで何も進展がない。

清次は機嫌を直すために仕方なく謝る。いや、少し面白がっていた。しかし、「このお目出度い日にこんなぎくしゃくした気持ちで一緒には過ごせない」という気持ちが心の内にあり、

――こんな謝り方は駄目だな。「俺」が悪いんだから――

「頼む。許してくれよ！」

「……」

二回目の謝罪からのこの気持ちの入りようが、まだ無視をし続ける月音の眉毛をピクリと動かした。しかも、その数秒後に微小の困惑の表情を見せた。

「このとおりだ！！」

本当に悔いている、そんな表情で月音を見つめ左手の薬指を鳴らした。

「ちょっ……そんなこと……私なんかの機嫌をとるために……」

――なんで、なんでそんなに真剣になって謝るの？清は何も悪いことはしていないんだよ！なのにどうして？ただ私が逃げちゃっただけで、それで、それで――

さっきの無視の様子から一変して、月音は困り果て思いっきり唇を噛んでいた。

「いや。謝らさせてくれ。あのこと思いださしたのも俺のせいなんだから！」

「違うの！すべてはわた」

――しの所為なんだから、すべて私の……――

二人とも自分に負い目を感じ自分の所為だと思い込もうとしている。

負のイタチゴッコが始まりそうな勢いだった。

――そっか。今までのことと、少し重なって、そしてまた。

だからこそ裏を返せば、本当に良い奴なんだな～ごめん――

「もうしゃべるな。もうみんな気にしちゃいないんだ。おまえだけが気にしちゃ損だろ！」

月音がまた謝っている、途中から清次がでかい声で遮り、怒鳴りながらも優しさが感じられる言葉で、月音を落ち着かせようとした。

「でもだからってそんなの」

――いいわけがないじゃない。私が納得できないのだから――

納得がいかなく、でも清次の強い言葉に、月音の言葉の強さがだんだん弱くなってきた。

第十一話

「そんな謙遜するな。俺はあいつらみたいに変わってなかったろ！だから見捨てない。月音が好きだからな。それに引っ越したし。前、月音の町の方行ったらたくさんの友達と一緒にいた。お前が一人になるはずがないんだ。俺が確信しているんだ。間違いない！」

清次は今、この時、言葉に魂を込めて叫んでいた。言い終わった後「何でこんなに熱くなってしまった」と少しの羞恥心と戦っていた。

「……うん。ありがと」

「月音？何か顔赤いぞ。熱でもあんのか？」

「ふぁぇえええええ！な、な何でもないわよ！」

明らかに月音には何かある。でもそれに気づく者もいれば気付かないものもいる。

世の中には何の為にあるのかが分からない物、考えがある。それをどのように理解してそしてその後どうするかが鍵になる。小さなことだが今の月音の反応を追求していけば何かが分かったかもしれなかった。一つ一つ重要さの順位はあるのだが、一つのことでも一人一人重要さの順位はある

「そうならいいや。それより腹減ったな～」

さっさと冷蔵庫に向かう清次は、かなりの早歩きだった。

「待ってよ清、まだ」

――いいかサプライズなんだから――

「まだなんだ？」

「ううん。何でもない。それより私もおなかすいちゃった」

あからさまに違う話題をふって、月音は今の言葉の追及をさせないようにした。

「おまえの分の飯って、あんのかな？」

清次は、わざと話題を変えたのを分かっていたが、話したくなさそうだったので、その話題に乗い、以外にもそれに疑問を持ち『どうなんだろう？』と困惑の表情を見せた。

「うん。わたしもお邪魔している身なんだけど清美ちゃんが用意してくれたんだ」

「そうか」

月音の謙遜っぷりの片言に、喜びの念が少なからず隠れており、清次は、それに気づいたか気付いていないかは、分からない。だが極僅か、月音に気づかれるか分からない笑みを見せていた。

「「「いただきま～す」」」

「それにしても今日はすごい豪華だな」

「あったり前でしょ！」

小さい子が背伸びをして、可愛げに上目遣いで、真剣に誰かに分かってもらいたいような、そしてどうだと言わんばかりに胸を張り、自慢をする時の顔。この仕草がどんなに可愛いか、それは清次にだけしか見せないのだろうか、清美がどれだけ可愛かったか分かっていないのだ。

――……久しぶりだな、こんな顔。そしてこんなに可愛くなってしまったか。なんだろ、怖い。こんな可愛い子をほっとくやつなんていない。はぁ～――

「そうだな、ありがとう」

清次のただ一言の『ありがとう』それだけですべて言いたいことが伝わる。この世に二人としていない血のつながっている兄妹、たとえ今まであまり口を利かずとも、その絆で結ばれていれば零れ落ちることはないのだ。

第十二話

「へぇっ、あ、どういたしまして」

最初、少しの戸惑い、驚きがあったものの清美はすぐに払拭した、が、最後のお礼の言葉が少し早口になってしまった。

――お兄ちゃん、そんなの反則だよ～そしたらもっと……――

「あのさ～せっかく三人で昼食なんだし高校の話とか今の近況を話そう。月姉の高校の話もすごく興味あるし」

清美は清次の目を見ながら言い、その後清美の顔を意味ありげに見つめていった。

いろいろと話は弾み時間の流れのはやいこと、四時半の鐘が鳴っていた。

「私もう帰るね」

この言葉の後に「また明日」とでも言いそうな軽い感じで、もしかしたら本当に明日会うかのような、提案だった。

「ああ、そうだなお前こっから遠いもんな。気をつけて帰れよ」

月音の自然な言葉に清次は何の違和感も持たずに、『いつもどう

り』な感じでの返答をした。

月音の家は、今はここの最寄駅から二十駅先にあり、そしてこの県のもう一つの都市にあたる。そしてこの流れから分かるようにここの最寄り駅は都市部の中心の駅、ではないのだが、そこの一つ先の駅である。

「うん。でもその前に」

一旦、月音は言葉を切り、そしてまた続けた。そして後ろに持っていた綺麗に包まれた小さい袋を前の方に持ってきた。

「誕生日おめでとう」

ぶっきら棒にしようと月音は努力しようとしたが、清次と目があった瞬間恥ずかしさのあまり顔が紅潮した。普通？ならこの時点で『恥ずかしい』という気持ちを表に出さないように、口調が強くなったり、『バン』と袋を渡してさっさと帰ってしまう、そんなこともあるかもしれない。しかし、その後満面の笑みで大事そうに『プレゼント』を渡した。

「やっぱり覚えててくれたんだな。ありがとう」

少し皮肉がこもっていた。

本当は、もっと吃驚したかも知れない。しかし、清次は、朝の清美のおかげで今日が自分の誕生日ということを知っていた。しかも、月音が、プレゼントをくれなかった年は無かったからである。

「まあね」

――忘れるわけは無いわよ。でもこの反応、私だけ取り残されているのね――

月音は清次の足から全身を見上げ、何の前触れもなくウインクをした。

「あ、そういえば世の中って物騒だよね～。駅まで送っていくよ」

とってつけたような言い回しで、清次の言葉の中に『心配』の文字が見当たらない。

もしかしたら、この微妙な空気を変えたかったのかもしれない。

「何ぼけてんの、ふっふふふ」

「じゃあ私が月姉を」

清美をとり残して、さっきまで二人の世界に入っていたが、ここぞとばかりに清美は悪乗りしてきた。

第十三話

「もう、清美ちゃんまで……」

月音は、笑い声が呆れ声に変わり、でも笑ってた。

「じゅあ、私はもういくね」

「ああ」

「あ、夏休み明けまた来るから。じゃあね」

月音はドアに手をかけた時、思い出したことを口に出した。

「あ？うん。またな」

何でだろうと疑問に思っていたが口に出さず、また会うことを当然のように約束した。

「さようなら」

「……あ、月姉、じゃあね」

――なんで私、ボ～っとしてたんだろう？――

扉の向こうに広がる景色があった。五十メートルだろうか？駅までの距離が。

――さっそくプレゼントを開けますか――

月音が帰った後すぐに、部屋に戻り『大事なもの』に手をかけた。

赤い長方形の紙袋に緑の斜めにかかったリボン、クリスマス？と勘違いしてしまうような配色で、真ん中にかわいらしい絵が描かれている。

その一生懸命作られたであろう袋を、清次は破れないように綺麗に剥がしていく。

すべてを剥がしてあらわになったのは、『幸福ランド』の無料券二枚と、高級チョコレートと、一番下に隠れるように潜んでいた手紙だった。

清次はゆっくりと手紙を手に取り周りを見渡し、最後にドアに注視した。無意識にこの行動を起こしたのだが、誰にも見られたくない、一人で読みたい、こんな思いが心の奥にあったのだろう。

そして、手紙を開いた。

清へ

今日はお誕生日おめでとう

去年の誕生日は、いろいろあり清の家にいけなかったから、無理やり清の家にプレゼントを送り届ける形になっちゃったけど、今日

は清に会えてそして手渡しでプレゼントをあげられて、嬉しかった。この気持ちは今書いている時はわからないけど絶対に嬉しいと思う。だから、清も喜んでいてもらえるとうれしいな。でも、本当は無くなるものではなく、形に残る物がよかったけど、彼女でもないし駄目だよね。
私をふって三年が経つよね。あのときはすごく悲しかった。そして今も悲しい。清、この意味はわかるよね。今は家が遠くなって会えなくなっちゃったけど、清が時々でいいから私のことを考えていてくれると嬉しいな。
夏休み明けもしかしたらまた清の家に行くかもしれないからその時には返事お願いね。時間はたっぷりあるから、存分に悩んでください。
幸福ランドの券は、清美ちゃんもしくは清の友達とでも行ってください。そして楽しんできてください。
本当はもっと書きたかったけど、さすがに多いのは引くよね。だからこのくらいで終わりにする。

じゃあね

佐橋　月音より

「……月音」

清次の申し訳ない気持がいまの表情を渋くさせていた。

――何か最後のところが妙に空いてるな～――

清次が手紙を顔に引きつけて目を凝らした。

――消した跡があるな～まあでも詮索はやめておこう。……消したのだから――

「――コンコン」

「お兄ちゃんちょっといい？」

清美の声はいつもよりトーンが低く、何かに恥じらっている震え方をしていた。

「ああ、いいぞ」

ゆっくりとドアが開いて清美の足が一歩一歩と部屋の中央まで来た。清美が清次の視線に入り合わさった時、もう一歩足を進め清次と四十センチの差になった。無表情のまま数分見つめあっていたが、もういいだろうとポケットから何かを出して清次の手に乗せた。そして、すぐさま背を向けて歩きドアの取っ手に手をかけた時

「改めて、おめでとう。……じゅあ」

そっけなかった。

「ああ、ありがとう」

――三年ぶりか――

清次は受け取ったプレゼントを高く上げ窓を見た。ちょうど沈みかけの太陽と重なって眩しそうだった。

第十四話

ピピピピッピピピピッピピピピッ

――あれ？いつもならこの時間なるはずなのにどうしたんだ？――

ガチャ。清次の部屋にドアが開いた。誰かが泥棒のように近づいてくる。

「なんかようか清美？」

目を半開きにしながらベッドから体を起して横を向いた。

「へぇえ！！」

素晴らしく驚いたのだろう。突拍子もない声で叫び、目をパチパチさせながら、起きている存在を否定しようかという目で、清美は目撃していた。

「何で起きているの？もしかして目覚まし鳴った？」

「はぁ～～～。何でそんなことを聞くんだ？もしかしてお前が止めたのか？」

清次の目が半開きなことは置いといて鋭さが宿っていた。しかし、清次が目つきが鋭くなるのは半分が無意識なので清美はもちろん僻んではいなかったが、少しの間呼吸を止めていた。

「……そう。私が止めたの」

よく分からない空気に罪悪感を覚えた清美が、『何かを納得した』ような韻を踏んで正直に答えた。

「何でまたそんなこと？」

「……」

――今日からお兄ちゃんを起こしてあげよう！って心に決めていたからです――

当然思う疑問が問われ数秒が経った。

清美は中学の制服（ブレザー）裾を思いっきり握り、この兄に分かってもらえない複雑な気持ちが溢れ出てきて、その力を分散させようと努力している。

「まあいいや。飯作ってくる」

――バカなのかこいつ？いやバカか。まあこんな小さいことで朝からテンション上げたくないしいいか。もし朝俺が起きれない人間だったら怒ったかもしれないが、あいにく起きられるしな。でも何で止めたんだろう？――

はぁ。と一息吐いて立ち上がった清次が、立ちくらみでゆらつきながらも一歩を踏み出した。二歩目を踏み出した時、

「大丈夫だよ。私がもう作ったから。そして、今度から交代制はなし。私が毎日作るようにするから」

清美はきっぱりと言い切り、清次が断ってもそれを認めないという目で清次を見た。

「そうか……なら頼む」

――もしかしたら朝食が作り終わる時間まで寝かせようとしたから、だからかな～――

断る要素もなく、逆に助かるとさえ思って、快く了承した。

「じゃあ早く下りてきてね」

清美は少しはつらつとした声で言った。

部屋から出た清美は少しにやけて次の独り言を喋った。

「二つのうち一つは達成したけど、さすがにもう一つは厳しいよね～毎日私がお兄ちゃんを起こしていいって。キャァァ～」

第十五話

「清美今日はありがとな。そしてこれからはよろしく。じゅあ学校に行くから。お前も遅れるなよ」

「うん。行ってらっしゃい」

――主語がないからドキドキしちゃうよ――

清次が出て行ったあと清美は顔を赤く染めた。

――昨日と一昨日はなぜか部活がなかったが今日から朝錬。気を引き締めないと――

朝の光が、家から出た清次の左側に影を作っている。太陽に向かうように前を向きそのまま真っすぐに進む。

ここは一本道で右を向いても左を向いても住宅ばかりでこの先は前しかなかった。

清次が歩くにつれて後ろや、小さい脇道から学生らがぼちぼちと現れてくる。

この時間ほとんどが、部活がある学生たちで、そんなにはいないが十人弱が歩いている。

――また平日が始まった。はぁ～、そろそろか――

歩いて五分右側に大きい公園が見えてきた。そしてその公園の中央まで足を進めた。

この公園の中央の周辺には大きな芝生もどき（いつも普通の芝より三センチ長い）があり、土日や、夕方では子供たちの遊び場になっている。

この公園は円状に近く円周上には林と言えるほどの気がたくさん生えている。

周りには、清次が入ってきたところに小さく人影が見えるが、それ以外は誰一人としていない。

その静けさに清次は数分浸りながら一言「よし」と小さく言い、手をメガホン代りにした。

「あああああああ――――――――」

――よし！これで今日が始まったな――

思いっきり音を発した清次の顔が清々しく、目がきらきら輝いていた。

そして声に反応したのか風が右から左へ柔らかく吹いた。黄昏が似合いそうな雰囲気の中、一枚のチラシが落ち葉のように通り過ぎた。清次はそれに目も留めなかったが、前を向き苦笑いをした。

――これが俺の日常、まだだれにも見つかっていない――

入ってきた方向に清次は向いて、もと来た道通りに歩いて行った。

さっきも見かけた人影がまだそこにありだんだん大きくなってきてる。

清次はどうでもいいと通りすぎようと思っていたが、名前は覚えていないが同じクラスの人に見えていたので、途中で木に隠れた。幸い、後ろを向いていたので、気付かれることもなくじょじょに隠れながら近づいて行った。

「お願いね。絶対よ。」

「……うん。それは分かっているわ」

「……交渉成立ね」

ニッと笑った。

「ばいばい」

目の前に手を振った。

――おいおい。危なくねぇか？一人で喋って一人で笑って……――

怖くなった清次は足音が聞こえないように後ずさりしてさっさと学校に行こうとした。しかしなぜか急にくしゃみがしたくてたまらなくなり、清次は「何も見ていなかった。ここで一人でくしゃみをするだけ」と現実逃避をしたが、とうとうしてしまった。

清次は、木の横から右目だけ出して、名前を忘れた少女を見た。

「「……」」

確かに目が合っていた。

――蛇に睨まれた蛙とはこのことだったのか――

「「はぁ～」」

二人は理由は違えど同じように溜息をついた。

第十六話

「は？ここはどこだ？」

清次は周りには何もなく何も見えなく、ただの暗闇しか目に映っていなかった。

「え！？」

清次は自分自身のの声ではなく、驚いた少し小さい高い声が聞こえた。

「……」

――はぁ。あ～寝ていただけか――

『え！？』の声で起きた清次は瞼を開き天上を見た。

清次は、確かに自分の部屋の天井を見上げ、自分のベッドに横になっていた。

「お、お兄ちゃん。何でまだ家にいるの？……さ、さっき出たよね。あれ？私の妄想がこんなに大きく？……」

（たまたま？）清次の部屋に入ってきた清美が、いるはずのない兄を見てパニックを起こして、被害妄想までしてしまっている。そして何も悪いことをしていないのに怒られた時のように目が泳いでいる。

「あ、あぁ。清美か〜」

清次は何も考えないように努力して、空っぽの頭で清美を認識した。

「って、やっぱおかしいよな？おいおいおい。やばくねーか？」

清次はブツブツと独り言で今の現実ではありえない現象に度肝を抜かされていた。

「お、お兄ちゃんだよね？さっき部活に出かけたのに、何でここに寝ているの？」

「……」

現実に清次がここにいると分かった清美が、清次にもとへ素早く移動して質問した。

しかし、清次も清美と同意見であり何も答える事ができなかった。

「俺も分からない。ただあの女と目があった瞬間、気が付いたらここにいた」

「あの女、あの女って？」

清次の真剣な目が清次自身の言葉に信憑性を持たせ、清美はこの出来事であろう『原因』を執拗に尋ねた。

「同じクラスの人だが、まだ名前を覚えていなくて」

「そ、そうなんだ」

「……」

解決できないこの状況が沈黙を作り、二人とも明後日の方向を向いている。

人間はどうしても理解できない解決できないことが起きた時、どんなに考えたってどうせ答えは導き出せないのである。この状況に陥った時点で、何もできなくなる。だからこそ柔軟に考え、見方を変えて、時には人の助けを借りていかなければならないのである。しかし、それでも無理なことは、以外にも世界にあふれている。だから、そのこと自体を考えないようにする。いわゆる現実逃避をすることではある。もしくは無理やり常識として植え付けてしまうかもしれないのである。

しかし人間は弱いところがいくつもある。したがってまだ理解、解決できるかもしれないという出来事に背を向けることもある。

「あ！清美、今何時だ？」

清次は不意に、今しなければならない重要なことを思い出したこのような声で清美に聞いた。

「七時だけど」

清美は、不思議そうにそっけなく答えた。

「そうか。じゃあな。俺急ぐから」

いつもの場所にあった自分のエナメルバックを持ち、清次はドアを勢い良く開けて走って、家を後にした。

「そう。遅れないようにね」

第十七話

――何だったんだろう？――

清美は、自分の頬を抓って現実かを確認した。

その後、清美は放心状態の中自分の部屋に戻り、学生鞄から筆記用具もろもろを取り出して、両手で頬をパシンと叩き目を見開いた。

「宿題。早く終わらせなくちゃ」

「本村先輩すみません。遅刻しました」

清次の心臓の鼓動が速く、息も乱している。その中、キャプテンのもとに素早く駆けつけて、頭を下げながら言った。

「そうか。腕立て五十回、そうしたらコート挨拶をしてサーブを打て」

本村先輩は、事務をこなすように淡々と指示をした

「はい」

大きく通った真剣な声で清次は応えた。

ここ花田下高校ではいろいろな部活が、人数も多いことから比例して（十クラス四十人）文科系、運動系と豊富である。

その中で男子バレー部は割合的には少なく各学年合わせて三十人ほどである。

体育館中に絶え間なく声が響き渡り、清次は、隅で小さく腕立て伏せをしている。

「四十九、五十。は～終わった」

清次は、自分にだけ聞こえる大きさで言い、走って自分のサーブを打つポジション向かい、人一倍大きな声を上げた。

清次は、ジャンプフローターサーブを打ち（よく全日本女子が打つようなサーブ）

「――――――コン」

今まさに清次が打ったボールが赤い小さいコーンに当たった。

ここではサーブを打つ時間には、エンドラインとアタックラインの両端と真ん中に赤い小さなコーンが置いてある。

（二コート合わせて計二十四個）そこを狙って常にそこに打てるようにというのが狙いだが、倒れたら近くにいる人が元に戻すという面倒くさいことがある。しかし、当の本人たちは全くそんなことは考えておらず、さも当然のこととしてやっている。

ここでこの第二体育館全部を一つの部活が使っていいのか？と思うかもしれないが、ここは体育館が三つあり、しかも、時間や日にちで割り振ってあるため、大丈夫なのである。しかしこの話は朝限定で（朝練をする部活が少ないから）放課後は、反面だけしか使えないのである。

今日は月曜日で、朝は男子バレー部の日、いつものようにたくさんの大きな声が響いている。

「は～。今日もいい汗かいたぜ」

何かを隠すように清次は大きい独り言を言う。

清次は自前のTシャツを豪快に脱ぎ地面に落とす。その後エナメルバックから制汗スプレーを出し自分自身にかける。そして鼻歌を歌っている。

「清、今日はやけにテンションが高いな。何かいいことでもあったか」

ひき笑いをしながら清次のバレー中間、友達、クラスメイトの遠藤康志は尋ね、最終的に意地悪く追求してきた。

「いや別に何もないけど」

いきなりテンションが下がり清次は如何にも何かがあったような雰囲気を漂わせていた。

「もしかして今日遅刻してきたのって？」

「だから何もないって」

康志の言葉を軽く一刀両断して、清次は、断固拒否した。

第十八話

「……そうか。まあいつか教えてもらうことにしとくよ」

清次がこうなったら絶対に教えてくれなくなると、入学して約一カ月で康志は段々と理解しだしていて、聴きだしたい気持ちを断念させて、未来形の語尾で逃げた。

「そうですか。でさ、　康志、一時間目って何だっけ？」

清次は苦笑いしながらも流し、一転して、朝の予定を聞いた。

「数学」

「マジか、新田の授業だろ！朝からつらいわ～」

とても面倒くさそうに清次は吐き捨て、新しいTシャツを着た。

新田という先生は、口が悪くて有名であるが、それと反比例して教え方がうまくて有名である。だから、新田先生は、生徒から指示が良い悪いで真っ二つに分かれている。

「本当だよな～」

二人でため息をついた。

「阿藤」

部室の中へ聞こえるように、既に着替えた本村先輩が、スライド

のドアを開けながら清次の名前を呼んだ。

「阿藤。今日なんで遅れたんだ？」

さも当然の質問のように本村先輩は清次に尋ねた。

「ちょっと寝坊してしまって」

清次は一カ月も顔を合わしたことがないキャプテンに、少し体を委縮させながらはきはきと答えた。

「まあそんなところか。阿藤は中学の時寝坊を何回したか覚えているか？」

「えっと、合わせて二、三回です」

清次に探るように聞いてきた本村先輩が、今の答えを聞いて少し笑顔を見せて「そうか。今度は遅行するなよ」と言い残して、教室へ向かった。

『キーンコーンカーンコーン――――――』

どの学校にでもあるようなベルのメロディーが流れている。

「やべ～。予鈴鳴っちまった。急ごうぜ」

「おう」

二人とも急いで制服に着替え、バッグにスプレーやらプリントやらを素早く詰め込み、もう二人しか残っていなかった部室に鍵をか

けて、走って四回の教室まで登って行った。

「阿藤、遠藤。お前らはバカか？三十秒でも遅刻だぞ。ほら、そこに突っ立ってないで早く席に着けよ。あ、今日はお前らにバンバン当てるから。間違ったら、おおいに笑ってやる。はっはっは」

『おぬしも悪よの～』『お代官様の方こそ』のやり取りのような汚い笑い方、が似合いそうな笑いで、新田先生は、二人に言った。

性格の悪いで有名な新田先生であるので、当たりがいつも通りのキツさで、細かい事にいちいち突っかかる先生である。

――やはりこの先生は嫌いだわ～――

「なんか一気にテンションが下がるわ～、最初から下がっていたけど、でもあの言い方、やっぱりムカつく」

清次は、重い足をいかにもだるそうに見えるようにさせて動かしながら、康志に小声で愚痴を言った。

「俺も無理、あの態度ムカつくことこの上ない、仮にも先生なんだよな？」

康志は清次と同じような行動をとり、その上、無意識ではあろうが舌打ちをした。

二人は新田先生に重ねて「早く、早く座れよ～」とだるそうにしながらの言葉をもらい、イライラをどこにも発散できなくて「は～」と溜息をして自分を誤魔化した。

第十九話

「やっと終わった」

数学の問題を当てられるのに確実に答えなくてはいけないという緊張感から解放された清次は、脱力感に浸っていた。

「ホント。マジ切れそうだった」

康志も同じく、手を万歳にして机の上にうつ伏せになりながら伸びをして体重を預けた。

「俺も、それにムカつくことに教え方は神級にうまいしな～」

新田に対しての皮肉を吐き、目をつむって何も考えない時間を作った。

「あの～、阿藤くん」

「あ？」

授業が終わり直ぐに清次の席に近づいて行った高校一年の女子の平均身長より少し小さい、責任感はありそうな、でも内気な女の子が近付いてきた。

内気な少女が無理やり気を貼っているような声で聞いてきた女の子に対して、清次は、不機嫌のまま強い声で反応して、しかも鋭い睨みで女の子の目を見た。

「あ、一時間目は大変だったね」

清次の睨まれた言葉に驚いた西條（西條美羽沙、兼、クラス委員長）だったが、先ほどの話題を取り上げ、苦笑いしつつも話しかけてきた。

「ごめん驚かせちゃった？でもそうだね……。で、今日なんか仕事あったっけ？」

清次は謝り、受け応えしつつも、もうその話題はやめてと嘆きも入っていた。

そして清次は、クラス副委員長という肩書も持っていた。

入学式が終わり次の日、やはりと言うべきかクラス委員長、副委員長を決める。ほとんどの人は、やりたくないし、ましてやいろんな中学からこの高校に来ているので知らない人だらけ、故に推薦のしようがないのである。

静まり返ったクラスの空気にいやでも耐えなくてはいけない、ここで動いたら下手したら望んでもいない重荷を背負わされてしまうと誰一人として無言無表情で供託を目視している。

どこのクラスからも声一つ聞こえない時間が他のクラスでも同じようなことをしていると思わせられる。

五分間の沈黙の後、隣のクラスから「は～」「よかった！」「マジで？もう終わった」「頑張れ」と安堵の声や、悔しがる声が聞こえてきた。

隣のクラスでは既に決めごとも終わったようで騒がしい音が聞こえる。

いままでに述べたことだが、知らない人だらけと述べていたが、同じ中学だった人がいる人もいるわけで、しかも親戚や意外な知り合いというのもある。

「立候補はいないと思っていたが、それでも一縷の望みかけていたんだけど、やっぱり駄目か。何かいい方法ないか？」

「……」

このクラスの担任で英語の担当である橋本先生は、いかにも人気が高そうなハンサムな先生で、しかも二、三校の学校を経験してきた慣れた感じで（実際その通り）みんなの緊張をほぐそうと試みている。

橋本先生のこの行動で笑顔を見せたり「クスッ」と笑う生徒たちも現れ、しかし依然として、橋本先生の軽い質問に答える生徒はいない。

第二十話

「まあそうだよな。じゃあクジで決めるか、公平でいいだろ？だからこそここに大きいクジの箱を持ってきたんだけどな」

赤い大きな真ん中に大きく？マークがある箱をボンボンと橋本先生はたたき、笑いながら喋った。

さすがに驚嘆した生徒たちが「え～」とか少なからず声が上がったが、橋本先生の「お前がやるか」と目があった生徒に発して「早くクジ引きをやりましょう」と絶対にやりたくないという表情で、その時の不幸な生徒は答えて、さっさと名簿純にクジを引くことになった。

――あれ？何だろうこの文字？『当たり』なんてものが書いてある。何かにぶつかれとでも言うのか？……は～。災厄だ――

この後、清次と西條は話しあって長か副を決めた。

二人は前に出て抱負を言った後、さっそく橋本先生に「今日の放課後用事あるから二人は、教室で待っていてくれ」とありがたい言葉をもらった。

昼休み、一時間目が終わった後に清次が西條に聞かされたように、たくさんの必要な書類やらプリントやらを橋本先生と清次と西條の三人で運んでいる。

「先生こんなにあるとは思いませんでしたよ。そしてその半分を俺が持っている。西條はわかるけど、何で先生も俺の半分しか持っていないんですか？」

自分ばかりいやな思いをしていると清次は思い、嫌味をだるそうに橋本先生に言った。

「先生も年だからな。ここは若い者が頑張るべきだ」

当然だろ？という表情で橋本先生は、自分の歳を武器にして笑いながら喋った。

「……まあしょうがないですけど……」

一年二組と上にある札に書かれた教室に着いた清次は、もう抗議しても意味がないだろうと思って、肯定の意思を示した。

この会話を楽しそうに聞いていた西條は何も語ることは無く、笑顔で二人の後ろについていき、自分の教室までそうし続けていた。

「この机の上に置いてくれ」

バンと教卓の隣の小さい机に置いてそれぞれのプリントをどこに置くか指示をして、最後にご苦労だったと言わんばかりに二人の肩に手を置いて、ニコって笑った。

「じゃあと一往復頼むな。残りは二人で済む量だからお願いな。じゃあ俺は、飯食ってくるから」

手を合わせて社交辞令のお辞儀をする橋本先生は、少し悪気があったのかすぐにこの場から逃げたかったのか小走りで教室を後にした。

「「……」」

二人は橋本先生の今の一面を見て、絶句していて見えなくなるまで見つめていた。

――あの先生は……なるほど、ああいう先生なわけか……。でも、やる時はちゃんとやりそうだし、面白いかも――

「いくか」

清次は、充実した表情なまま短く西條に一言いい、いち早く足を踏み出した。

「うん」

西條も橋本先生のところを不思議がっていたが、清次の言葉に反応して遅れないように少し走って追いついた。

第二十一話

「そういえば西條さん、前から思っていたんだけど人前に出るのあまり好きじゃないでしょ？でも頑張っているよね。一対一はなんか普通っぽいけど、ね」

教室を出て、二階の英語研究室の橋本先生の机の上にあるプリント類を取りに行こうと、四階から階段を使って下りている最中に清次は、歯を見せ少し照れながら西條を褒めた。

クラス委員長に決まった時、西條は、アガリにアガッて言葉にならないくらいの噛みようだった。

「まあ、ね。二、三人までだったら、うん、まだ大丈夫なんだけど、大勢になると、なんていうか、やっぱり駄目なんだよね。阿藤君は私と違って緊張しないの？」

「う～ん、しないと言うとウソになるけど、全然平気かな。中学の時も強制的に整備委員長とかやらされていたし、アガッてられなかったんだよ」

西條は、自分の汚点を嘆きながら、『前に出れる人の気がしれない』とでも言うように清次に質問してきて、その時の上目遣いの破壊力に気が付いていない。

しかし清次は、清美や月音から散々使われてきていた手が『上目遣い』だったので、西條にその魅力に全く気付いていなかった。

当の本人も気付いていないと前に述べたように、二人ともそこら

へんに疎いようである。

「へ～。すごい、ね。それじゃあ阿藤くんにたくさん頼れる！これからもよろしくお願いします」

「うっ、うん、こちらこそ。それでそっちは何かやっていた？」

懇切丁寧にお辞儀をしてきた西條に多少驚きはしたものの清次は、純粋に

――西條さんは何やっていたんどろう？まあ、すべてが自分で決められるわけではないのだし、じゃんけんで負けて余ったものをしていたかもしれない――

と思い、西條の委員会に興味を持ったりしなかったりしていた。

「何かって」

「あ、中学の時の委員会」

西條は頭に？を作り、清次は正確に教える。

「あ～。三年間、体育委員やっていたよ。長とかはやっていなっかったけど」

誇らしげにどうだと言わんばかりに答えて西條は、二階に着く最後の階段の残り三段のところで、「えいっ」と飛んで、体操選手見たいな着地をした。

「へ～。図書委員とかやっているかと思ったよ」

後から階段を降りながら清次は、初見の時に感じた思いのままもう先入観として決めつけていた。

「え～。本なんて読まないよ。しかも私は運動神経いいのよ。バスケで県選抜だったんだから」

なにが『しかも』なんだか分からないが、全項否定をした後、誇らしげに自慢をした。

――やっと分かった！西條は清美に似ているんだ！背も同じくらいで俺の見方や自慢の仕方がそっくり、まだ西條とは他人行儀な感じかと思ったが、たぶん人懐っこい？からだろう。でも人に迷惑をかけなさそうなのが違うところだな。性格そのものも違いはいろいろありそうだし――

「すごいじゃん、それ！俺はバレーやっていたけどチームが弱すぎて活躍できなかったからな。でも勘違いするなよ、自分で言うのもなんだけど隠れた逸材だからな」

西條に対抗するかのように清次、自らも胸を張って、ドヤ顔をしている。

第二十二話

「そ、そうなんだ。それでね同じようなことを、ヤ―ちゃんにも言われたんだ」

違和感がなく発したあだ名、西條の友達、後の親友、高野夜野。この発言からも分かるように、西條は高野のことを信頼している。（お人よしかもしれない）

「ヤ―ちゃん？」

入学してやっと一カ月たったころ、まだ男子ほぼ全員と半分の女子の名前と顔が一致しており、クラス全員の名前を覚えていなかった清次が、ましてやあだ名何か分かるはずもなく、頭を？にして聞いた。

「あ、同じクラスの高野夜野ちゃんだよ」

「ああ。元気すぎる無駄に可愛いやつか、あいつともうそう呼ぶ仲なんだ。性格が違うと思うんだけど？」

西條に的確な教えのおかげで合点した清次は、疑問を持った。

「・・まあ話を聞いて」

西條は清次の悪口だろう言葉に目をつむって、清次が全然理解できていないと悟り、一呼吸して、全容を語ろうと準備した。

「初見では私、おとなしそうな文学少女って感じでしょ？前に出た

時もすごいアガッちゃって。でも今の私はどう？普通に喋られるでしょ。図書委員らしいに少し違和感が出てこない？そういうことよ！やーちゃんはこのギャップに興味を持ってくれて話しかけてくれたんじゃないかな？今はもう大切な友達だけど」

通常の喋り方からだんだん言葉がなめらかで早くなってきて、言い終わった後、西條の息遣いが少なからず乱れていた。

「あ、うん。なるほど」

清次は若干驚きはしたものの

――以外にも感情表現が豊かなんだな西條は。人はみかけによらぬとは正にこのことなんだ！――

「……ごめん、わたし喋りすぎちゃったね……」

西條が顔を紅潮させて、言葉をなくしている。この雰囲気に流され清次も、なんだか気まずくなり、二人は無言のまま廊下を歩く。

「着いたね。じゃあもう一息頑張ろうか」

清次は何か話すきっかけを作ろうとして、一言出た言葉だった。

「そうだね」

「「失礼します」」

ノックをしても返事がなく、清次はしょうがないのでドアを開ける。

そして、橋本先生の机のところに行き、気合を入れるために腕をまくった西條が、隣でも同じように腕をまくった清次を見て、「クスッ」と笑い、清次も笑顔を見せた。

「「失礼しました」」

最後に出た西條が、ゆっくりとドアを閉めてプイッと前に振り返った。太陽の光に当てられた清次の髪の毛を見ながら、ワンテンポ遅れた右足を前に出す。

「阿藤君って光に当たると茶色くなるんだね」

「うん？あ、ああ。そうなんだ。鮮やかな茶色だろ？」

清次は、最初は何を言われているか理解ができていなかったが、西條の視線の先の正体に気付き、何気ない自慢をした。

清次の髪の毛が普通の時は黒色で茶色の『ち』の文字も浮かび上がらないほどだが、光に当たると、透き通った鮮やかな茶色があらわになる。

「うん。すごくきれい」

小走りで清次にたどり着いた西條は、顔を近づけてきらきらとした目で髪の毛を見つめている。

第二十三話

「よく言われる。でも、西條の髪の毛も茶色いよな」

「うん。でも黒がよかったな。他の人は茶色に憧れているけど何でかな？」

西條の肩までかかったセミショートの髪の毛の先を、手にとって自分の目の前に持っていきながら、髪の毛と清次の目を交互に見やっている。

「さあ。俺はどっちでもいいし」

清次は、興味がなかったのか一言で終わらせて、窓から差す光の上に立ちどまっていた自分たちを、教室へ向かわせようと、また足を進めた。

「そうなんだ」

――阿藤君は髪の毛には興味がないのかな？でも、整髪料は付けているし興味はあると思うけど……色は関係ないか。でもやっぱり黒髪がいいな～美夏乃ちゃんって真っ黒で、すごく似合っているしな～。ううん、関係なく可愛い、

「美夏乃ちゃんは、可愛いな。私もああいう風になりたいな」――

ちなみに、西條の顔は癒し系で、話し方もややそっちよりだが、話すスピードは普通なみで、スポーツがすごくできることとの、ギャップがある。

「何だ突然？……そういう願望ってやっぱり女子は全員持っているのか？」

清次は、体全体を小さくピクッと動かし、思ってもいなかったことを口に出してしまっていた。

――本当に突然すぎる。何の脈絡もない。もしかしたら思ったことをすぐに口に出してしまう性格かもしれない。正直なんだな。でもいつ話題に出そうか迷っていたから丁度いいかな。あのとき公園にいた奥村美夏乃、二時間目の出席の時にやっと思い出したんだ（一時間目は新田にムカついて忘れていた）今日はどうしたんだろう？

――

「何で？当たり前でしょ？」

西條は顔を真っ赤に染めて、少し八つ当たりのように答えた。

「まあそうだよな……。ごめん何でもないから」

「そう？」

清次は、適当に聞いてしまったことに、西條は、考えていたことが口に出てしまったことに恥ずかしくなり、早々にこの会話を打ち切ろうとした。

「そういえばその奥村さん、今日休みだよね？」

清次は、真っすぐ前を向いたまま、西條に問いかける。

「そうだね、何でだろう？美夏乃ちゃん今日の体育楽しみにしていたのに、風邪でも引いたのかな？」

心配している様子で西條は答えて、一緒に体育をできなくて残念そうにしていたる。

この花田下高校は、男女別に体育をする。そして、一、二、三と四、五、六と七、八と九、十に別れて体育をしている。

「ふ～ん。奥村さんって……普通の人だよね？」

清次は探っているように聞いた。

――ミスった。この聞き方、いくらなんでも駄目だよな～――

「ん――――普通。ん――――わ、私の友達かな？」

西條は、当然動揺して唸りながら頭をフル回転させている。そして一つの結論を出した。

「……ごめん。今の忘れて」

清次は、パッと西條を見て、しかし目を合わせられないで、忘却を要求した。

「ほら、後、三十分しか昼休み残っていないよ」

「待って、阿藤くん」

走って行った清次を追いかけながら、忘れようと努力した。

第二十四話

「木村先輩。今日も用事があるので帰ります」

放課後、清次は第一体育館に行き（男バレの今日の活動場所で時間が前半と後半に別れている。そしてその前半を使える）木村先輩にいつもどおりに言う。

月曜日だけ清次はとある喫茶店のバイトをしている。そのためこの日はいつも部活を休んでいる。

この学校は、許可さえ取ればバイトができるようになるため、バイトをしている学生は少なくなく、すこしフリーな学校なのである。

「ああ。事故だけは起こすなよ。じゃあな」

「はい、さようなら」

畏まりしかし大きな声で清次は挨拶をした。もう日常化してしまったこの会話は、いつになくいつもう通りだった。

「清次またバイトか？」

清次と同じ部活の多摩君は、呆れながら問う。

「ああ。でもこれから毎週あるからな」

「短期じゃなかったのか」

少し驚いた顔をして、すかさず質問をした。

「ああ。それじゃあな」

「おう」

急いでいる様子で、駆け足で後ろを向きながら清次は手を振り、サヨナラのあいさつを交わす。

ガラン。心地好い金が鳴り誰かが入店したのか分かる。中では、クラッシクがこの店と同化して良い雰囲気を醸し出している。

「マスター、こんちは」

「おお、清次くんではないか。いつもすまないね～」

優しそうな中年のマスターは、ゆっくり顔をあげて誰が来たのかを悟り、親しげに喋った。

普通、店から入るのではなく裏口から入るのだが、なぜかこの店にはなく結局店から入るしかなかった。

「大丈夫だって、学校の許可はもう貰ってあるって言ったじゃん。でもさすがに月曜日にしか来れないけど」

清次も親しげに話し、このマスターに大いに敬意を示しているのが分かる。

「気にしないで、部活は一生の宝。出ないと僕が君に申し訳なるからね」

「まあ、俺も部活はしたいし、ありがとうございます」

マスターの優しい言葉に、精一杯のお辞儀をして清次は、笑っている。

「うん。じゃあ着替えといで」

清次とマスターの関係は、とある事件から知り合い、その時、間接的ではあるが互いを助けあったのである。

「今日は、あまり客は少ないな。せっかく今日からできると思ったのに」

清次は眼を下にむけて、その状態から徐々に上に上げていき店の扉を見た。

「そうだね。清次君のオムライスおいしくなったのにね。たぶん僕

のよりおいしいかもしれない。オムライスだけだがね」

称賛した清次のオムライスだけマスターは褒めた。マスターにも譲れないプライドがあるのだ。

しかし、ここにいる数人のお客は、誰一人としてオムライスは頼んでいなかった。

第二十五話

ガラン。お客が二人来店した。カップルのようだった。そして開いているテーブルを探して奥の席に座った。

「あの店員さん」

男の人が近くにいた清次を引き留めた。

「はい。注文ですか？」

営業スマイルで清次は、素早くお客のもとへ行き、手を腹の前で組んだ。

「ここ、初めて来たんですけど、何かお勧めはありませんか？」

男の人は、小さいメニュー表を持ち出して清次に見せながら聞いた。

――もしかしてこれはチャンスなのか？いやもうこれしかない――

「オムライスはいかがでしょうか？」

清次は、さっきよりも笑顔で強い声で推し進めた。

「いくらですか」

「五百円です」

値段はメニュー表には書いておらず、全く値段が分からない。（マスターの狙いで）

二人は顔を見合って、心の中で意思疎通を交わしたのか、一つ頷いて清次の方を見た。

「それでお願いします」

「かしこまりました」

『お客を待たせてはいけない』この言葉を心に刻んだ清次は、早歩きで客席と対象の位置にあり客側からまる分かりなキッチンに向かい、オムライスを作り始めた。

カップルは興味深く清次の料理姿を見ている。そして「お～」の言葉が無意識に流れた。

「お待たせしました。では、ごゆっくりと」

「すごくおいしかったです。また来たいと思います」

「うん。本当においしかったよ君」

カップルの両方ともから笑顔がこぼれ、清次を温かい目で見ている。

「ありがとうございます」

カップルは、お会計を済まして、店を後にした。

「ありがとうございました」

「良かったね。始めてすぐにファンができるなんてたいしたものだよ」

先ほどのカップルのお会計を済ましたマスターは、清次の肩にそっと手をやり温かい目で見て、納得したように頷いた。

「そうかな？」

半信半疑の清次は、まだ現実として受け入れていない様子だったが、確かに清次の頭の中では、あのカップルの言葉がぐるぐると回っているのだった。

だんだんと吸収をしていき、笑顔も見えてきた清次は「よっしゃ！」と握りこぶしを胸の前に持ってきた。

「そうだよ。でもなんか、出会ったころを思い出したよ」

「なんで？」

マスターの哀愁漂う表情に頭では分かっていた清次だが、『出会ったころ』のキーワードを聞き、つい疑問の言葉で聞いてしまっていた。

「接客が初めてできた時の顔に似ているからかな？」

マスターは昔と対比をして、成長した清次に達成感を感じて、そして清次がその時と同じ志を持っていると分かって、心底うれしそうである。

「ふ～ん。……そしてその時……」

マスターの温かい気持ちに気恥ずかしさを持ちながら、清次はそれを隠すように頷き、その時の記憶を思い出した。

第二十六話

三年前、清次の妹、清美が小学校六年生の時、引っ越してしまったとても仲が良かった友達の家に遊びに行くために、最寄駅から二つ先にある駅まで一人で出かけた。

帰り道で財布を落としてしまい途方に暮れていて一時間半、清美に話しかけてその後一緒に財布を探してくれた男の人がいた。

一時間が経ち、何と財布を男の人が見つけ出した。清美は何度もお礼をしてその場を離れようとした。そのとき

「疲れたどろう？そこの自動販売機で何か買ってやるよ」

関わってしまったのっだからとことん関わろうと男の人は、ノリで喋った。

「いえ、そういう訳には」

足を半歩後ろに動かし、手を胸の高さまで持っていき『結構です』と清美はサインを示した。

「たった百五十円だ。気にすることは無い」

「……分かりました。ありがとうございます」

渋々了承した清美は、さすがにもう遠慮の表情を見せたら失礼にあたると思い、笑顔で応えた。

百メートル先にある自動販売機まで歩いて行き、「どれがいい？」と男の人は聞いた。

清美は、レモン味の炭酸飲料に指をさし、出てきたそれを男の人は手渡した。

「あ、お父さんだ」

五歳くらいの女の子が、男の人のところへ全力で駆け寄り抱きついた。

「時人（ときひと）さん今日は早いのね。……そこの女の子は？」

仕事から早く帰ってきてくれたことに嬉しさを感じながら、女の子と一緒に来た女の人は、清美に目を向け、時人と呼ばれた男の人に答えを求めた。

「あ、あの私は阿藤清美と言います。先ほど財布を無くしてしまって探してもらっていたのです。あの、奥さんですか？そ、そのお綺麗ですね」

いきなり現れた第三者に驚きながら、清美は自己紹介をしてしまい、今の気持ちを正直に言った。

「あ、あの……ええっと……」

清美は、初対面でいきなり思い切ったことを言ってしまい、戸惑っている。

「ふふっ、ありがとう。清美ちゃん。綺麗だなんて嬉しいわ。それ

で失くした財布は見つかったの？」

「はい。おかげさまで」

三人で笑いながら、女の子は一人キョトンとしていた。

「そう。清美ちゃん、もう八時で夜は危険よ、今日は私の家に泊まっていかない？」

女の人は一変して真剣な目で清美に提案をした。その後、柄にもないことをしたと女の人は思って、また笑顔に戻った。

「「え」」

ピクッと清美と時人さんは女の人を同時に見て、その後同じ行動をしたどうしで目を見合した。

「なんで時人さんまでそんな反応するの？」

不思議そうな顔で女の人は時人さんに聞いた。

「いや～いきなりで、もう春佳さんったら」

おどおどした様子で時人さんは答えて、その後……撃沈した。

「あの、迷惑かけてしまうのでそこは遠慮させていただきます」

デジャブが起きている。一つ一つの行動がすべて同じで、しかし一つ、清美は、諦めが悪いくその体勢が長かった。

第二十七話

「大丈夫だって、私たちなら大歓迎よ。……親に連絡すれば大丈夫。さあ行きましょう」

清美の意思はもう通じることは無く、春佳さんは楽しそうに清美の腕を掴んだ。

清美は女の人に手を引かれ、数歩歩いたらいきなり止まった。

「ここよ」

「……」

清美は言葉に出せないく、突然の声に、目の前の光景に驚きを隠せないでいた。

――って、まだ十歩も歩いていなかったのに、着いてしまった。それよりも……大きい。何坪あるんだろう？」

「ふふっ。そんなに裕福ではないよ。隣の一軒家」

自嘲気味に春佳さんは隣にある一軒家に指をさした。

左右対称で、周りには入口以外緑があふれている百坪くらいの大きな洋風な豪邸がどっしりと建っている。その隣にポツンと一軒家が豪邸を正面において左側に見える。ただの住宅街にあればどこにでもある立派な新築の家なのだが、対比されるものの大きさが比べ物にならないので、どうしても小さく見えてしまう。

「はあ……」

顔も真っ赤にさせて清美は一瞬、素敵な家族も見て頭をうつむけた。

「昨日は本当にありがとうございました。あ、そこのコンビニで兄と待ち合わせしてます」

深くお辞儀をした清美は、ニヤッとした顔になり出会ったころと逆の状態になり、昨日の夜の間で打ちとけていたようだった。

ここの駅は何かと複雑で分かりにくいため、近くにある某コンビニで清美は、清次に待ってもらうことにしていた。

某コンビニの目の前に着いて、ちょうど先の信号が赤だったため車を止め「ここでいい？」「ここでいいです」と交わして、後部座席に乗っていた清美はドアを開き、最後に

「真菜ちゃん。じゃあね」

昨日会った女の子、真菜に満面の笑みでサヨナラをした。

「本当に本当にありがとうございました。さようなら」

何度も何度もお辞儀をして、もう待っていてくれた清次に目を向

けた。

清次は、歩いて車の方に向かって着いた時、助手席にいた春佳さんにお辞儀をして、目の前の信号が青になった。

「もうあまり迷惑をかけるなよ……いくぞ」

ぶっきら棒に言いながらも清次は清美のことを心配していたようだった。

「あれ？」

清美は、清次に指で目の前の出来事を教えようとした。

先ほど見えなくなったと思った時人さんたちの車がユータンをして、二人の方向に向かってきている。そして、二人が立っているそばの某コンビニの駐車場に車を止めて、真菜は春佳さんに抱っこされながら、家族三人で二人のところに来た。

「やっぱりこのお兄ちゃんだよ！」

真菜は春佳さんから下りて清次のもとまで走って、時人さんと春佳さんに向けて清次に指をさした。

目を輝かせながら清次の左手を、真菜は小さい弱々しい両手で握ってジャンプをしてはしゃいでいる。

第二十八話

「ああ、よく見たらあのときの女の子か」

――元気そうでよかった――

清次は、真下にいる自分の腰くらいにいる真菜を見下ろして優しい笑みを浮かべている。

「真菜が『止めて止めて』と五月蠅かったけど、あなただったんですか！先週はありがとうございました。どんなにお礼を言っても足りないくらいです」

時人さんと春佳さんは深く清次にお辞儀をして、清次は、照れを必死で隠している。

「え？なに！お兄ちゃん知り合いだったの！？」

突然の出来事に訳が分からなく清美は四人の目を順番に何度も見て、レベルの低い挙動不審状態になっている。

「ああ、まあね」

清次も少なからず戸惑っていたが清美の様子を見て、冷静になった。

「あのね、清美ちゃん、清美ちゃんのお兄さんには、私の娘、真菜を助けてもらったことがあるの」

困惑していた清美に春佳さんは真実を教えた。

「え！？」

自分のお兄ちゃんが人助けをするなど思ってもいなかった清美は、ある意味違う驚きを隠せないでいた。

「丁度、幼稚園の帰り道、私が高校の時のお友達とばったり会っちゃって、二、三分目を離した隙に真菜が居なくなっちゃったのね。その時私はすごく焦ったわ。そして案の定……真菜が道路の真ん中を歩いていて轢かれそうになった。もう駄目かと思ったわ。でもその時現れたのが清美ちゃんのお兄さんだったの。ふっと現れて車に飛び込んでいったわ。しかし車に轢かれなかったものの、勢い余って真菜を抱えながら近くの電柱にぶつかったの。その時丁度、救急車が通りその惨事を見ていたらしく、止まって二人を病院に連れていったわ。私はその光景を何もできないままただ見ていただけだった。本当に母親として失格よ。でも貴方のおかげで助かった。本当にありがとうございます」

春佳さんは清次を優しく心を込めてお礼を言い、時人さん無言で清次に握手を求めた。

早朝と言うこともありまだ人はまばらにいるだけで、朝のすがすがしい感じが五人を包んでいる。そして朝の透き通った空気が、この駅に来て初めて見えたちっぽけな高い山をより一層目立たせている。

「……」

――こんな話初めて聞いた。何でそんな危ないことをして黙ってい

るんだろう？……もしお兄ちゃんに何かあったら私はどうすればいいの？もう本当に本当に……――

清美は心の中でとてつもない恐怖を思い描いてしまって、顔には出さないものの、泣いていた。

清次と清美の両親が海外で働いているため、一カ月に一度しか家族全員が集まらない。だからこそ、清美は頑なに自分自身の感情を否定しているが、清次は清美が生まれて物心が付いたころからの唯一の気を許せる存在だった。

しかし誰も清次でさえ清美のこの気持ちを理解できているものが居なかった。だから「誰にも気づかれる訳にはいかない」と良く分からないしがらみが清美の心を覆い、悲しさを抱えたままにすることしかできないでいた。

第二十九話

「おい、清美大丈夫か？」

心配そうに清次は清美の顔を覗き込む。

「うん、大丈夫。少し驚いただけ」

無感情を装い清美は応える。

「そうならいいけど」

春佳さんは、二人の誰も気が付くことができないような空気を察知して、ひとまず沈黙して、また話しだす。

「本当はもっと早くお礼を言いたかったのだけれど、名前も言わず、治療も受けず病院を出たって聞いたから、当てがなくて……でも今日こうして会えるなんて！その後は大丈夫だったの……」

「清次です」

「清次くん？」

春佳さんが止まった空白の時間に、清次はすかさず助言をして、春佳さんが最後の文で訪ねた。

「まあ、ちょっとしたかすり傷だけだったで。……あの時、気絶をして気がどうかしていたのもありますが、急いでいたもので病院を

飛び出してしまって、娘さんを放置した形になってしまってすみません」

「いえ、そんな謝らないでください。あなたは、命の恩人なのですから」

清次の思いがけない謝罪に時人さんと春佳さんが二人で目を見合せて、時人が言葉を継いだ。

「て、えええ！気絶したの！？大丈夫なのお兄ちゃん？しかもなんで家族にそんな大事なこと言ってくれなかったの？」

とうとう爆発した、訳ではないものの清美は執拗に清次に迫った。

「面倒くさかったし、恰好悪いだろ気絶したなんて、しかも今ピンピンしているから大丈夫だろ？」

清次は自分の胸を軽くたたくでもなく、なぜか、上腕二等筋を軽くたたいて示した。

清次のちょっとした、気遣いでもあった。

「そういう訳にはいかないよ。後から大変なことが起こったらどうするの？」

「そうだよ、清次くん」

春佳さんは心配そうに、『まだ病院行っていなかったの』と言う表情で聞いた。

次いで時人さんも心配そうに、今にも連れて行きそうな勢いだった。

「でもそんな金……」

清次たちは、一か月の食費等々、集まった時にもらっているが、親が厳しいのか、最低限しか与えてくれず、毎月二、三千円前後しか残らない。清次は残りの千円を清美のお小遣いとしてあげているため、残りのお金が少ない。そして最近、衝動買いの為清次の懐が雀の涙ほどしかなく、とても病院に行くことができなかった。

「私たちがそのくらいは出してあげるよ、なんて言ったって、命を助けてもらったわけだからね」

清次の状況を知ってか知らずか、当たり前だと言うように言った。

「でも、さすがに」

「いいから今から暇か？」

話題転換したように時人さんは清次に聞いた。

「まあ……」

清次は、曖昧に答えながら、時人さんの意図したことに気づき黙り込んだ。

「じゃあ行くよ」

「え、ああっ……」

半ば強引に車に乗せられて、五人で近くの整形外科に向かった。

清次は、肋骨を一本折っており、いろいろと大変だった。

この時から、お金を返させてくださいと時人さんが経営する喫茶店でバイトするようになり、お礼と、半分小遣い稼ぎで、今に至っている。

第三十話

「もう三年がたったんだね。真菜は、清次くんに会うのを楽しみにしているからまた今日は、構ってやってくれ。いつも通り児童センターから六時ごろ帰ってくると思うから」

昔を懐かしみながら、マスターは毎週のお願いをした。

「はい」

清次は適当にしかし嫌がることなく、了承した。

――そういえばもう日常化しているんだな。……今頃気づくなんてな……――

「マスター、一つ相談があるんだけどいい？」

壁に寄り掛かっていた清次が、腰の反動で立ち、遠くを見ていた視線をマスターに移す。

「僕でよければ、どうぞ」

コーヒー豆を煎りながらそれに集中しつつ答えた。

「マスター、ええっと、あ、あるヒトがあるヒトに告白したんだよ、

そして返事は四ヵ月後にしろだって、まあその間会えないからなんだけど。ちなみに二人の関係は三年前までは幼馴染。どう思う？」

『恥ずかしがるとは柄じゃない』と思っている清次は、別にそういう気持ではなかったにしろ、はっきりと言った。

「どう思うって……。その人のことが好きならＯＫすればいいけど、この流れじゃ、告白された方は、好意は持っているけど好きではないか、好きと言う気持ちが分からないのか、他に事情があるのか、いろいろ考えられるけど、どうなんだい？」

数ある気持ちを、すこし興味を持ったのかマスターは顔を清次の方に向けて言った。

――どう何だろう？でもまあ、だからなんだろうか？――

「……好きという気持ちが分からないの、か、な？」

考えれば考えるほど答えが分からず、清次は曖昧にそうだろうと答えた。

「……それはどうにもならないのかな？でも好意を持っているのなら付き合っちゃえば？」

「それはさすがに駄目な気がする」

マスターの適当な答えに、真剣になって清次はめが据わっていて断固拒否した。

「純情なんだね。でもそうすると……断るしかないのかな」

なす術がなく、マスターは途中でため息をして最も適当な答えを出した。

「ごめんね、初めて好きになって初めて付き合って結婚したのが春佳さんだからね」

笑いながらしかし悪気が感じられない表情でマスターは、疲れたのか一回伸びをした。

「……また、のろけ言う……相談相手間違ったな」

解決できなかった悩みが今の自分の心に浮揚しないように、清次は、独り言として片付けた。

「本当にごめんね」

「いいよもう。ほらマスターコーヒー豆そろそろじゃないの」

話題転換を所望した清次は、今の現実をマスターに告げる。

――ああ、そういえば幸福ランドの券どうしようかな？男友達と二人で行くのもな～？でも女子と二人きりとかデートでもあるまいし。……あれ、じゃあ何で好きだといっときながら、あの券を渡すんだ？意味がわからん。まあいいや、仕事仕事――

「ああ、そうだね」

マスターは手を動かし香りをかぐ。

「ああ、いい香り」

マスターは、兎に角、優しいマスターだった。

第三十一話

「ただいま」

勢いよく扉が開き誰かが来たようだった。それに伴いベルが鳴る。そしてかわいらしい元気な声が響く。

「あ、きーくんだ」

真菜がいち早く、自分の父親ではなく清次の方へと走っていき、勢いよく抱きついた。

時間がある日はこの喫茶店にバイトをするため通い続けていた清次は、たびたび会う真菜を相手にすることも多くなっていた。今や、真菜は清次に対して父親以上に懐いているのかもしれないと思われる。

「おかえり」

清次は、抱きついた真菜の頭を撫でて、さらさらな長い髪を指先でなびかせる。

「むぅぅ……。お父さんは？」

「おかえり」

「うん。ただいま」

明らかに不機嫌そうに答えた真菜だったが、父親の温かい反応にホッとして、顔をほころばせた。

やはり親子と言うべきか、その絆は計り知れないものがある。

「ねえねえ、きーくん、今日ね生活の授業でヨモギ団子作ったの。それでね、きーくんの分を残しておいたの」

嬉しそうに真菜は自分の背よりもはるかに高い清次を見上げ、赤いランドセルを肩からおろした。そして袋を取り出して、中に入っていたものを清次に見せた。

「あれ？『き』の下がない！」

急に真菜の顔が真っ青になり、袋の中を一生懸命に探している。

「どうしたんだ？」

真菜の言っていることに全く理解ができず、清次は質問せずにはいられなかった。

「ない、ないよ～。どうしよう」

「真菜ちゃん、本当にどうしたの？」

今にも泣き出しそうな顔の真菜に清次は、今度は慰めるように訳を聞こうとした。

「えっとね。団子を『き』の形にして作ったの。でも下の棒がなくなっちゃって」

真菜は小さい手にそれを乗せて、清次に見せた。

平仮名の『き』の書き順で最後の四画目のところは、上と離れているため、真菜は二つに分けて、後で完成させようとしていた。しかしそこが無くなってしまい、アタフタしているのである。

「ありがとう真菜ちゃん。気持ちだけで嬉しいよ。それに、それをよく見て、下のがなくても片仮名の『キ』になるでしょ」

清次は、すぐに自分の名前の頭文字をとって真菜が作ってくれたと理解し、機転を利かせて笑顔にさせようとした。

「……あ、ああ。本当だ！」

真菜は一気に笑顔に戻った。

「よかった～」

真菜は安堵から、腰が抜けて尻餅をついた。

真菜はM字の座り方をして「へへへっ」と少し恥ずかしがりながら笑っている。

「きーくん、おくち開けて。はい、あ～ん」

立ちあがった真菜は、清次の手にある『キ』型の団子を清次の口元へ持っていき、清次は、真菜が届くように屈んだ。

「おいしい？」

不安げに真菜は聞く。

「おいしいよ。真菜ちゃんはお料理がうまいんだね」

「へへっ」

真菜は自慢げに笑う。

微笑ましそうに傍らで笑っているマスターは、内心、自分のは無いのかと考えていたが、言葉に出せず、ただ見ているだけだった。

（真菜の袋の中には、まだ入っていた文字があった）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3859y/

叶えたい夢

2012年1月1日00時58分発行